

2024年1月28日（日）／説教者：神谷武宏

説教：「まかれた種」

聖書：マルコによる福音書4：1～9

イエスは「種をまく人」のたとえを、どのような意味をもって語っておられるのか。当時のユダヤ社会は一部の裕福な者を除き殆どの民衆が貧しさの中にあった。

新約聖書の諸文書とほぼ同じ時期に記されたユダヤ教の文書第4エズラ書にこんな言葉が記されている。「農夫が地に多くの種を蒔き、多くの苗を植えるが、時が来ても、蒔かれたものがすべて無事に芽を出すわけではなく、植えられたものがすべて根付くわけでもない。それと同じく、この世に蒔かれた人々がすべて救われるわけではない」（新共同訳旧約聖書続編エズラ記8:41～）。ここでは「農夫」は神を現し、「蒔かれた種」は人間を現している。実にイエスのたとえ話の中にも、明らかに神を農夫に譬えるものが少なくはない。「種を蒔く農夫＝神」、「種＝人間」という図式で読んでいくとひどく残酷なお話にも聞こえる。つまり「種」が人間を指すのだとすれば、その種が蒔かれた場所、その人間が生まれた場所や環境によって、生きもし、死にもする。豊かにもなれば貧しくもなる。それは殆ど“運命論”といってもいい話になってくる。しかもその運命というのはひどく不条理で不公平なもの。しかしこの不条理な世界、不公平な世界こそが現実の世界であり、主イエスが生き、宣教された真実の世界ではなかったか。

蒔かれて落ちたその場所によって、豊にもなれば貧しくもなる。生まれついてみればその場所は石だらけで土も水も乏しく、飢え渴き干からびてしまう。生まれついてみるとそこは道端であった。人に踏みつけられ鳥についばまれてしまう。生まれついてみるとそこには成長を阻害する茨に覆われて日の光も当たらず、養分も奪い取られてしまう。けれどもある種は運良く耕された良い土地に落ち百倍もの実をつける。まさにそういう不条理、不公平をイエスの譬え話を聞いた人々も感じていたのではないか。貧しい人たち、病気を抱え差別されていた人たち、職業で差別されていた人たち。そして女性たち。イエスはとりわけそのような不条理の中に置かれていた人たちに語りかけ、それらの人たちと触れ合い、癒し、解放し、共に食事をする。そんなイエスに惹かれ、希望を感じて、イエスのもとに集まった人々がこの譬え話を聞いたのではないか。

あなたに病があるのはあなたのせいではない。あなたが貧しく苦しんでいるのはあなたのせいではない。沖縄が苦しく貧しくされているのは沖縄のせいではない。この世の不条理、不公平に怒りを発するイエスを、私たちは救い主と信じ、イエスの怒りがどこを向いているのか、そんなイエスの姿に従い倣う者でありたい。（神谷）